朝夷巡嶋記

第五編 卷四

へ 13
704
24

鷹巣氏蔵書
名札
門 8
號 704
巻 24

新選普通作文必用　中本　全二冊

右書頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニテ皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文ニ助書ナリ且ハ商家ニハ必ラズ便用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求アランヿ知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候

書肆　大阪北久寶寺町四丁目十八番地
文榮閣　前川源七郎

明治三六年十月九日購求

朝夷巡嶋記全傳第五編巻之四

東都　曲亭主人編輯

後輯第四十七

邁遭の矢口渡
出居の拏絆縄

却説蒙二郎ハその日今巷路ヲ。和田義盛の新第へ。校枝ガ贈物の一包を齎邁て。守戸ガ回翰を取得てけるふ。障るものなれバ。ものを。心おちゐるく今宵の宿客店ハ。この地の風聞を。ものを。異なるものなれバ原来冠者御夫婦も。恙なくもをハ。ものを。後やもさくハ心殘して。疲労を増ゼども。聊ら。翌も未明ニ宿をたちて。又ハ管ハ急ぐ。なんぞも十餘里を。輙く来て。矢口の船歩を。比申の時ハ些ー過て。折前面ヲ東の岸より。漕渡ル船を。遥ハ久しハ人黙乗

なる中に兄穂之助に似るあり。あるいふ。とぞうりは晴を定めて雨とびとなるよ。紛ふべくもあらず兄とうり心忽地飛ぶごとうり歓び甲斐もなくは船のあれば氣の向れてうを抗声を張り立て頻りまその名を呼び被るほ彼処にも頭を同じて平くあるものをうれども川風の烈しきに吹かれてとゞ呼声の定うはなるもなるも黙頭そう兄応をせびられ東へ彼は西へ漕離れもく船かれば者を問ハ遠ざうるぬ。

遂憾ぬの限りもあらぬを身ひとう乗る船やうねば西へ返せといふよりも。心頼りは焦燥のまに苦しきもつのねるほうまう側なる両個の賤夫ものく賞は乾魚を背負ふく西に向て立てとり件の船を遥ふとく彼小壺の浦太郎ぞう。

ぞも近属左右は造化ぞうとて活業をせぬまをけハ何ぞの所要はあらく。あらうとう人来ぶうとも譚ハうぞ兄のすやうぬ欲とぞうとも名の異なれば忽卒は問よくんハうぞ兄とこれも亦癖と撥くほ猶靴を隅ごとくん果ぬ驚の覚るに似うとうくまる程船ハまを東の岸に着ければ人みな散動く汀渚ほ登るほこれのまかくてあるべ兄はあるを徑ぞ遇ぬ遇もやぶぞ。ぞう熟思ふ従又この船に乗て再び彼処へ戻ぞ人聚合ぶバ船を出さぬ。ぞうバ時り遥に後れ追ひともいでう及ぶ兄ぞハ果敢ぬくうぞ兄に名告も値ぶ別ぞともあらうして西ぞ南沢鎌倉四下をとく索ねバ環りたりとうぶぬハ且今船の中れく。魚商人ほが噂せしハうぞ兄のまをうに似うう倘果してあるうんぬハ浦太郎とぞしうぞ兄の更ぞ今の名をあるぬ小壺とぞハ鎌倉なる小壺の濱ぞあるぞんかれば清く索ぬべ兄心的兄なあるべ愁ぶまの面をうんく再會の素懐ぞ遂ぬハまぞ時の至らぬあるべしさバれ彼商人ほが云云とぞハうぞ年来祈る神佛の彼人この言をぞ後の日其処に赴ぶく對面せよとの示現あるぬ既に斯心つ兄ぞハ直にあるより引ぶくとて小壺へぞ向れども大事の使を仕らしく稍その

菖蒲
棹とめつゝ
うき舟の
夫らちの波
松むしろん

回翰を取り移さう平晌ありとも遅滞せばそを兄よのこ減ゆく彼方ざるわハ不実之
とゑせまゝかくやせまゝと愛難く贍る空よ鳴後れる杜鵑只一声の珍しく不如
帰とうゑバけふハまゝ帰ハ不如と尋思して遂よ踵を旋らつ又ゆゑぐくの壁を
走りて今宵ハ渋谷よ宿投りけを蚤よ責られ蚊よ叫れて眠られぬ隨よ夫口の
ゑゑゑバ本意ゑ限りゑれども値んよゑのありけりとおひ久せば樂くく目
睡もせぬこゝを暁る旅宿の床を起出つ豆閑涼し紀風よ吹れて湯嶋の
岱まで来よけれバ東を迴よ眺るホ上總の海より日ハ升ぼく辰牌を過
ざるゑあより亦復急ぐ程よ熟くる路ハ十餘里を鄰へかゝよ心地して
日申の比及よ太田の荘へかゝり着ぬ角門より入る足音よ校枝ハ出迎く
あをいと早くと労へバ藁二郎ハ背よ負せし祇包を解おろしてゑゑ伊校枝ハ遊号
しゑゑゑ。ゑ回翰ハこの中よあんこれが庵温よ水もゆく頃日頻よ出ゆる紀く。

人ゑ変れバをの程よ。麁朶焚絶しゆゑ。僕ハ土足序よ水汲入れく躰せ
あるんあゑ姫ハ人ゑゑ回翰を。ゑゑゑまゝゑゑゑゑゑゑゑゑ。校枝ハ禁ゆゑ
今急ぐゆゑゑよ草鞋を解て休ひ給へ姫ハ云云とあゑ。歓し
ゑゑんゑく。ゑ坐遥へまゑゑと回答てゑゑ伊祇包を引提く奥ゑゑ赴紀るこの
日間中守直猛よ鄰郷ゑ。荘官許招れく出ゆ伊ゑゑゑゑ還ゑゑ見遊ハ
ゑゑゑ彼夏心よかゝる夏の雲俟ハ夕の雨ゑゑ。暑紀昏消し左よ右ホ慰ゆ難
たゑ折しもれ今藁二郎ゑゑりくとゑ校枝ハ走り跌くまゑよ彼一包をゆく来よ
れバ且見姫ハ海を撈りく珠をとりぬ心地しつゑゑれより早かゑゑゑ
ゑ回翰を賜くゑゑゑ疾その包を解てよといはゑゑ校枝ハ遽しく二重の包を
解投けバゆゑゑが回翰あくれゑゑ封推断くこれをゑゑよ先光仲の無異を述て
此度ゑの姫ゑ人より進らせゑゑ二包ゑ早速ゑゑゑゑゑゑホ云云と宣ハゆゑゑ。

請勧めて、ようやくこの便りに届け進ぜ吾侑へもと珍し紀鮓の鮓を賜て勧び給りこの頃八古の殿の猛き移徙のすをハおして今巷路の東北御館へこの度移らせ給ひ侍局のどの鹿破る何すもおぐ者つ況ぶ伊ハ後の日ものもこれらのうもまうしもと書き。且見姫ハ云云と拔枝が讀むとうち笑ふくさそハ俄頃の移徙まく倉卒なる折らうか支よく整ハられるもそなこの叔母前の大々なる誠心ものとあれ。あづそ郎の妻回翰をとそ包を引よとその一包を拔かくるるを回翰とあり。しかのハあらぐ曩よりぐ贈りこる。尺素の封皮を断るのを像見の扇を巻篭て舊の伝ものて返れるうあくいふ。とぞりを主後忽地與醒くるるかるるるとぞ。あん回翰ハこの中ものあるとと紫の服帛包を解拔ばこれもとの副翰を包篭てどぞ返れる訝ものの限りもかれば尺素ぞりの筆ハ悔あるを心ハ

かくハ返せもの拔とそるふとり拳る副翰の裏ハ識せ。あそあれもハのを引ハ。せこれバ一首の歌ハく。忘れてもられやハ汲んれもまく高野の里ハ玉川の午魚三行半ハ書るハ是疑べくもあ〳〵光仲のる迹と且見姫ハ行返。かへて。るの吟して梭枝ハ何と笑てるぞもハれ弘法大師の高野の奥の玉川の水とあるせ。歌をも。法大師の歌ハ紀の玉川の清紀ハ愛く旅人の玉川の名を忘るもハ汲でや過ん汲つべと愛ぶ。歌のるるぞぬるぬあ中葉より謬て紀の玉川ハ毒水とれバも高野大師の云云と詠ものとひもて侍へるるより玉と名を負るる清紀流れハ濡衣被て汲ものハ閑象神の怒りそのもの淵崩れ水個く今ハ名のをを送せ。とぞ家尊の大人の宣ひるるとぞ伏の歌ハ世の俗の謬傳へる隨ハ紀の高野の玉川ハこれ名るる毒水とれバ武蔵の高野る新玉川の鮓の鮓もこれも

愛やじと詠ぜり。やうこそあるめと益の蓋を桜枝は取らしてえめ。鼠も舊の侭あるく只一つを彼るよ留めれうとおもひ。彼を引くく復のくるる。鼠の色の何とあく初は変りしやうなれバ詠れし歌ハ故あるとぞ疑ひ解る折ふ畜猫の鼠の香をかぐ鼠墓やく且見姫の後方より秋の下を潜出て器の中の鼠ひつ爪推立く引落を桜枝ハうもうく噫姑麻よ正死をを苦しあれ退ぬと叱もぞ鼠引衝く些も放る眼を光らし背を張りて嘈鳴威しを片隅の簀戸の陰へ逃くる畫鳴て件の鼠を追ふ畫鳴て咲ひ竭ぬと云へ猫ハ忽地四足を乱しくうも遠を数回苦しむ声いと悲しく夥しう血を吐くそう侭息ハ絶ぬ殊ハ怪しき勢ハ駭く主従ハ斃れし猫を惜やとも竟ハその甲斐なし且しく且見姫ハ沈み頭を擧て涙さしぐむ目を押拭ひ噛桜枝曩ハ吾倚が封ふる鼠の有ればぞ。

異あるべくも思ハざりしハ斯迄烈しく物を害ふ毒を加へくるぶ丈夫ハ薄ひしハ誰が所為ぞんいちを且見が所行と坐ハ猜しの憎を憎を飽と云ふ。

[illegible]ハ筆ハ怒りの色ふかく離別の状ハ擬へし三十一字を云云と三行半か書あらんも現ぬ役柄ぞ何を恨ふ枉ぶを妹伏の中を疏ふを縦吾倚ハ去らるとも毒ありけるとをくも暁りて返さも更バふう丈夫ハ恙ぬを幸ひ有れとぞ思ひ締ぬそもこの濡衣を誰ぞ赤ぶ為ぬ乾ぬのあん。祈もし神ぬ捨らく過世ぬそと忍びあへぬ声ぬも立く泣更バ桜枝も倶ぬ禁ぬ涙の声を曇らく理りハ彼ぬ彼ぬ届ぶとも姫ぬ科ぬべしぬを慰ぬうう勧めぬ世しぬハが心苦しぬ。警ぬ物も捨ぬぞ。おぬもぬ鼠の毒ハ疑ひかぬぶ叔母のぬを制めぬ声高しぬぞう守戸が所為ぬ死渠りハ相譚れぬ。

鬼〻〻死後価をせバ袋の底より物の漏る鮮を返して毒あるすを明々地よ
知らぬ。こハその中より所なく〻〻藁二郎を召よせくさり氣なく問糺よ。
外よ術も〻〻不覚よ人をを疑ひそと諭されく沈吟ど。あら宣へバ寔よ然
ず藁二郎を招死うく彼処のゆうを問ゆん姫うへも問せあり。さいくく
立んとする程よ次の間よ人ありて校校刀祢立ぼもあれ。その譯曲よ聞えあげく。
ん疑ひを解くべ死よ要時まつひと呼留こり且見姫ハ驚死ぐ〻〻校校村ね障を
開せく主従弁一これをとうふこハ藁二郎ぞ有る絆の趣次の間よ縞文まつく
驚死憂ひく思念よ案苦む屈托の色蒼さるくうあ芝折つ敷居高げの進も
入らぬ只ぬと文死頭を低く黙然とてついねう且て藁二郎ハ身を坐行く。
障子の裡面へ入りて後方をくくり引崩く額をつ死姫うへさを切〻くそ。と
無礼とあ〻〻召らあ校校とあもくぞあん今彼件の錯誤をまく〻〻鮮くとも
誌あく。よ面ぶをある支ぶれども水汲果て見参よ。へらんとして憶ひもの趣
ろも笑く隨よあん饋物の鮮ゆ〻を初く知るるとれハ況毒を加れ〻ゆ夢ふ
ぐもこれをもぶ知らぬとふとも通れ〻れ。ぶ怒より釀〻る菊ゆそをれ。
支の顛末報きく〻人歎死をあく笑更校一昨日未の刻及僕ハ鎌倉へ走
着て更ハ豫て案内ハよく知う彼若宮巷路ゆ和田殿の第へいぬく閨門ゆ
執接人よ件の下包を遞与せ〻よ侯を一時許〻く。その人再び出く来つ折戸をゆく
女中ハあれども守戸とふハ絶てゆ名の違ふあ〻ぶやとそぶ侯包を返されう。
僕いあぐあろ必ぶ否ゆ日も使よ立く守戸の局のあん回翰をあり〻すあ。
いぐ〻ハ名の違ぶぶとと更ばその人訝りく。あ〻ばあを誰殿の第ゆりとあ〻ぶを。
問ふく僕些も疑ぶ若宮巷路よ隠れ死和田左衛門尉義盛殿のあん
第よあ〻ぶやとゆうあの人勝ゆ敷くそハあぐ〻ゆ〻ぶ和田殿の

筆ありしとぞ。主君より賜りしきの人迯よ移りのぼり。和田殿へ邁んとすれば今巷路の東とぶらひよ。あるかあらぬかと示されり。僕これをおろかに惑ひ。あらぬを誰殿の筆ぞと問せも果ぬ眼を睜りしくそれはなく何はせんとなく邁ひと追立さう。包ハ封の侭なり。怪しとおもふもかれば阿容々々と受とりて。件の筆を出去りつ。近ぬ頃の商家を件の筆を咨問ふ。和田殿の書筆へ猛よ移りしかひしれ。北條時政朝臣の在鎌倉の大小名多る中よ腹黑ぬ彼方さへハなく忌べぬ。特よ秘密の一包ぞ。よしあぞ一の程なりともその人よ遞与る後悔其処よ来ぬ。かりきれ異なく返されく包も封も変なるそれば。聊これ慰ぬ。今巷路多和田殿の。新筆へ来ぬ。しかも包ハ舊の侭なれば。詰問ふ。聊く回翰をぞ。あの時よ稍心ちなく。きの彼地を晨よ立ち。如ハつの歩を急ぎぬ。かの来ぬ。まぞそのまを報ぞよ眠なく背門の井幹よ没とる水の如くぬ悔ハ器の毒藥。その趣を洩ぬ。聞ぬ驚ぬ胸潰れぬ。人をも身をも恨ぬ涙よ袖を濡らして。これ彼命て推量れば。その毒を多賀殿を害せと謀りし人を問ぬ。知ぬ人なりぬ。されども多賀殿ハ車の本末知召ハ只姫ぬ人を疑ひのり現なん歎ぬハ理り。されどもハ全ぬを欲ぬハ僕ぬ命を捨ぬ。まうしを仕ん死。その後よこの頭を殿よ贈らせぬ。とぬ果ぬ身を起ぬハ投技ハ急よ引曲て。藁二郎ぬ何処へぞ死よ。ぬ知ぬ待れどぬ甚ぬ短慮なん不審ぬ。鮒のぬも泳せぬ殿の御歌も今ハなん物ぞ。稍ものをひられど。ぬ分ぬ死ぬ誰ぬ亦鎌倉へ使ぬ。ぬ折のまぬ隼人のぬを莊官許招。ぬ仍よ死ぬ且くあらく彼ぬよ相彈ぬ。ぬ智恵もなん一向なり。いぬぬ痛ぬ姫ぬの歎ぬを。ぬ慰ぬと推居れば且見姫ハ。ぬ落ぬ涙よ袖の暇ぬ哭ぬをぞ。ぬく頭を擡現この男の正直ぬ。既ぬ

事の破れに及びし。その行ひを悪むでとかく。曲に報し彼地の趣にが疑ひをとけ
られども解きかねしが夫の死疑ひをいつ申せんやと蒙二郎にうを鎮めて
検校が言もことくハが言も少し違し抑此度ハ夫へ消息を進らせし八官府の沙汰にも
違ふいと潜びゐる事なれバ中々よくも謀りけるその仇人を知りたりとも何処へ向く
訴べき素より敵ハ威権高けれバとてもかくても明々地にはなが夫に告がたし。
されバとてそのまゝ命を捨るともその頸を齎しくるが夫許遣られんや縦その
偶てありとても人を殺し身を立んよりハ刃に伏してそのまゝよけに縁故を案ずれ
時政何も故ありとはいへ夫をのといやる憎さよ見バ彼枉事も必とせんすあれ
ども證据なけれバ噂中に漫にその名を指ざしがたし。讐がすべき人の身へあれバ
しくまそのみにしてそのまゝ怨みなバ法を超人目を竊くこの消息を寄せ
ずもあらバ今との歎きはおもしかハその禍の胎を推せバ浅からずかし。まが心ある人

ぞも身をも怒てりとも只丈夫の為とのミおもひしハ彼飛禽の鴉の啄次鵲ふ
水澤の岩ね姫小松ハかの操ハかはらねども濁らぬ胸を着しかく仇あるもいひ易からぬ
現日も日もまがふ人に照しあはぬ世となり親に捨られ良人に去られ誰とかいはぬ
存命ん絶ぬ歎きに沈んより寃も科もなき人の数に入りなバ草の原身の果と
なく花の赤き心を竟にまが丈夫に志して苔石滴再びむすぶ縁しあらバ後の
よの世をも楽しかなとて南無阿弥陀仏と唱つゝ臂辺に掛置れたる護身刀を操取て
検放さんとしたりしバ検校ハ吐嗟と駭きつゝ携り禁あぐ春の上に降ゝて息
つきあへず。まづ物体なし姫ミ人あかさまにしかん歎きはさあれど乱さしめ狭
善も悪も陽陰の命ありてぞ明澄ハ立ん素より直き心操も彼枉津日の神
祟ふ幸なけるを累ねとも少しくなれバ日の光にも解びやなべき雪霜の迹なき
如く砕る春と和らん時と日を気永く俟せ玉ふし初中もまよし玉ひ大約此度の

なん不和は慈母の勧め侍りしこゝは事起さゞるを阿容くとして姫うよ。命を捨てゝ世を忍ばゞ形は人に似ずとも心は獣に劣りなん願はくは身を殺して。その亡魂は彼君の光仲を枕方に立て憂に入りそもあん疑ひを解ぎんやさはこの刃を貸せゝと諫め勧解つ力を究めく引放さんとしれども旦夕姫は握持る靭を巻て些も後めず苦況胸に沸復る涙は露の玉散る刀光閃くこゝ

あちと僅に駐わくやよ梭枝今はたゞあぬさの恋心いと浅うゝ思ひそでう科を人に負せんとてもかくてもこの身の薄命ゆひ絶る浮世の淵に甲斐絶く水垂月のゝ日を七日と思ひそよあぐくもあぐくも覚期を極めあを有いるこゝあるゝ放さゞや放ちてよと引ば引て主従の涙は洗ふ敷靭の諸は巻る彩絲は靭の姫百合小女郎嬉いつれ隙あれ必死の手ひ争ひ難てもあか放さゞ梭枝は後方を見くりく喃藁二郎との何てゞ刃は怕て

て身を貸さゞやひるゝの虚言ゆゝ共は共侶は姫うとゝ禁めゝ

間中ぬしのとく還りくゝは伯ばかく歩ゞ氣を問ゝのやはあんゝ

怨ゞとも藁二郎は領くのゝ始まり泛り近く膝を進めく目成てゝ

且見姫は云云と梭枝がゝを隙は捉られ両を振解く南無とゞりゝ

刃火を咽喉へ突立んとゞゝ刃の光ゝ共は藁二郎は衝とゝく刀を

丁とゝ落せば再び含んとゝを取ゝ脇を拂く推禁めんと

ゝ程は梭枝は刃を取あげく死んと刎ゝ透ゞゝ落て。

左右は引着動ゝとゝゝ目をゞく死枯良賤定ゝ只是

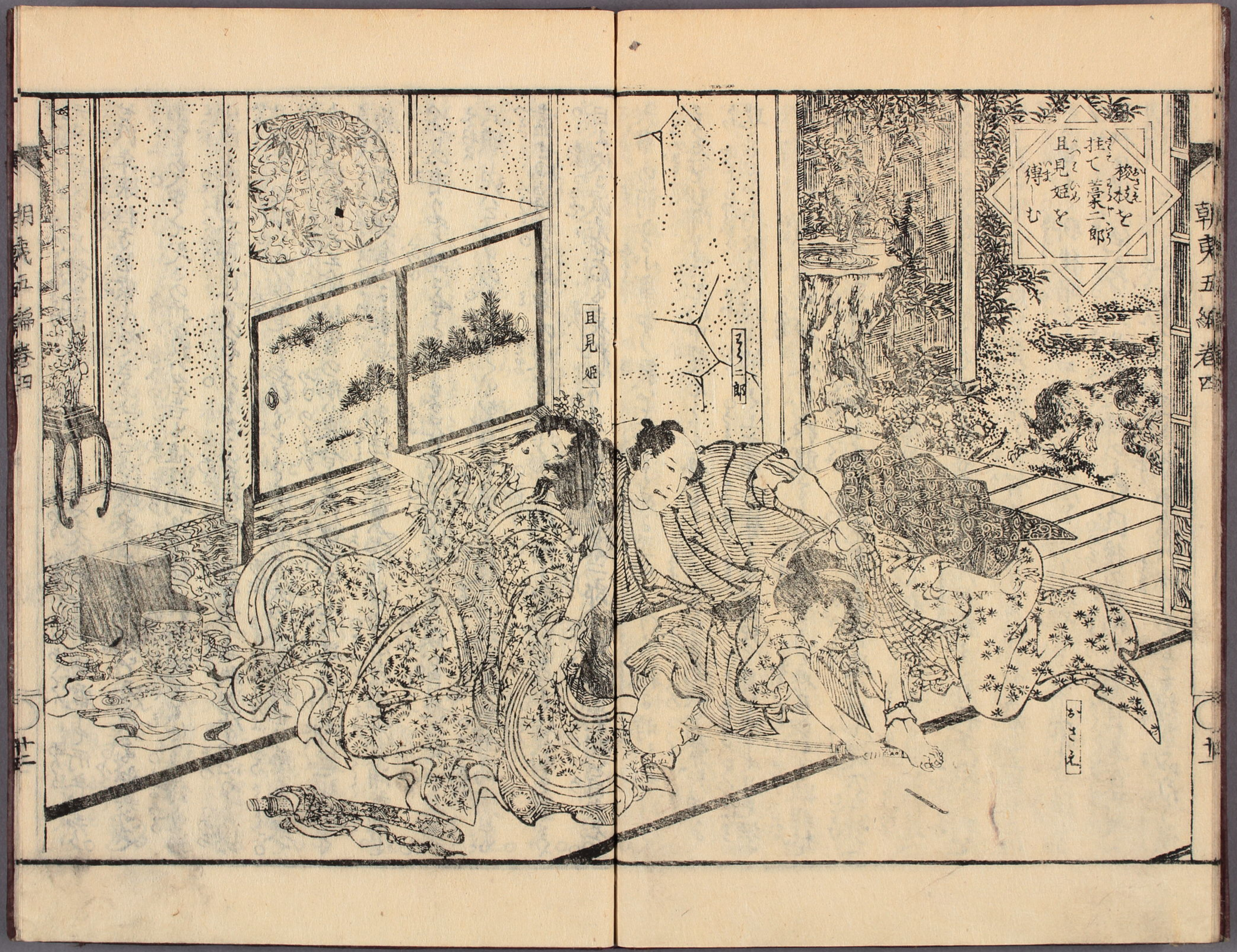
浮世とゝゝ三位入道頼政卿はゝ孫女廣綱朝臣の御息女と土

百姓ゝ藁二郎が整柄熟し暴巻ゝ鶯綱ゝ折檻は狗死せゞと

ゝゞゝ切ゝ主従の節義はその死を争ひゝを女中はゝ任ゝく

禁ざりしハ数年ぬ身の賤なる差てこさバと伴りつかのこをもて加んと
始より己の物〻幾遍とかく胷を冷せし苦しきを堪へ察しまどゝ主も
家隷も一トせぢよ突詰ひし必死の覚期を今又千萬諫めも用ひ〻ぞうも
あ況然バとく今この〻を放さバ又死人とく狂ひ人雖人四の還る恵いか
ぬ死と要時按じく左ひよ捉る桜枝ゞ腕を膝よ楚と引布く腰よ著る三尺
紅をとゝく解く口ひて引裂死繋合く且見姫の腕を背へ捩揚れバ声
うも立く泣ひ口よ武衛〻失こと縛く出居の柱へかゝまあく繋んとする
程よ桜枝ハうもちんくうも驚死をもむんと藁二ゞ自殺を禁んるゞりとも術
ことあくこれハ亦あゞりのす狂物体ゞ〻苦さハさせゞと敦圍く布し腕を辛
ぬく引脱拂ぬく立ひを妨も死を突死臂よ膳を磴と撲せ〻桜枝ハ苦と
叫ぶ果ゞ身を轉〻く倒れる。怪我よ驚く藁二郎ハ悔〻く覚と彼ハ色

大事の前ゞる小事ゞり氣を失ゞも死よ至ゞ今介抱よ時を移〻く
こゞ恵をむゞうせバその甲斐あ〻と思ハ久〻心つくも且見姫を繋死留めそ
送る刃を拾取りく鞘よ納めく上座ゞる刀架よ居置ゞつ身を退〻且見姫ホ
うも對ひく額をつ死姫ゞ人さ死腹さ〻く只憎〻とを思召ゞ不敬非礼を
知りくも竜よ似る縛ハ死命よ恵ゞく竟中を多賀殿のゞん疑ひも解て
御夫婦再會の道者とゞん為ゞり獨ゞも孔あげ〻ぞく漫よ寄を朝達へ
る僕ゞ疎忽の科ハ死〻く嘆ゞゞもあ〻ねどゞん目前ゞく自殺ゞん幾人も恥を
知り義よ仗く身の怒を賞ひ死と多賀殿へ告るゞゞハゞゞも霊をこの
土よ留ゞく聊後暗ゞぬゞん身の明燈を立ゞ〻んやり〻ゞ〻をこの縛ゞり
妹伏の縁〻絶ゞぞく只君御夫婦のゞゞ〻ゞ後の日何ホの面目ゞて吉見殿よ
見参ゞ死ゞゞ命運のかくハ短き歎ゞゞも霊ゞ餘りゞりこを諄言よ似ゞ僕


朝夷五編巻四
梭枝を
挂て豪二郎
且見姫を
傳む
豪二郎
且見姫
朝夷五編巻四
十二

元来異父の兄穂之助とよばれしが孝友の故をもて逐電して所在をあらず
年来往方を索もとめきのふ矢口の渡ゆくえ尋ぬれども船異なりて
あやとも思ひてかへさの折ふしなれば名告も値ひ別れ兎さまれ聊便宜をはかり鎌倉の
小壺が浦太郎とよばれしものあるべそ兄の穂之助なるべし果敢なき世を忍あてを後の
日彼処へ赴かばぞ遣んと思ひもとめ九夫の妄念浮世の夢と覚果て
今亦渡を死天三途弘誓の船入無合も兎姿婆の心の迷ひ御運ぞ尽く
殿共侶は鎌倉山は家造りして住つ兎ものの比ものあるべ小壺の濱は浦太郎と
いふもの有りと諸さもせくりもぞ兄でゆゆしいるまと僕が自殺の延告さもあへ
只願ひ兎ものもの兎もくも兎身を愛しく後日の栄を俟ぬ千萬ものも
盡せぬ詞言も身の暇をあらん名残惜しもいひけく背向はありく
目は絞る涙ん世ぬも哀れあり且見姫は藁二郎が自殺の覚期を目おもの

その遺言を耳はさけども物ものい兎ものの働ばば轉つ輾びつ身を悶て乱れ
髪兎黒髪の千行の涙も人の死も禁りもぞ泣ぬ藁二郎は其を見て兎
噫痛ましと兎ぞ思ひ心を鬼もつ遥は西とも仰ぎく又恭しく頭を兎
鴻恩禀る冠者御夫婦心の足らぬ某を人ぞしくおぼし召て太田の庭へ
赴かく且見姫を慰めもて依さ兎ものの甲斐もなくあるべ兎慈ものして
中とん詞もて。この世のしくハ主従のもん縁しハ短くとも牛もあれ馬も
あれ生もえりく仕へまらん願ハ御武運長久は絶こう家を興しの人
多賀殿ハ面者もく勧解まるべものもあるべみを是時の不祥なを
許さもと泣とりどちくとも方ようも對ひ朝夷へ今生の辞別ぞまるべ
去歳の春よりもりく御庇は立く復讐の本意を遂こう恩義をもぐ家
なりも醸とも兎死別はありよけりもれも冥土の障りもを冀くハ百歳の

齢をこもちく六合よいのまあ名を揚げ三ヨ目その他の人々一旦恵を乗こう。
稲向ひへもあまこのよを捨てくべと思ひとりどもく再び西よりも對ひ特に本意の
こが舎兄別れ一日より行方をも環りなんと思ひて仇を流し光陰の矢口の渡で外
ちく憐見る面影の身に立ちく忘れも中ぬ心の哀れ霧ぬ恋ひ和歌の月の
真如とやく哀ねども悪に染らん人の為に枉るまじせざりしにかく非命に終る
○只是過世の業報欲いともかこれを捨てく孝心篤き兄に慈親の
因果端なく環り来くかくはこの身に報ひけん五逆十悪无量の罪も懺悔はまりて
滅せとも済せも阿弥陀佛弥陀仏々々と念れば諸行無常と告ることを入相の
鐘の声月は澄りて影は心の間に照らんも白昼のごとく明らかなる藁二郎は
次の間に措きし行力を引提来て捧四五寸接試えて取りて右遣に着け
れば素より村落の痩百姓の子なれば腹切るまを知らねども美も悪も身を

劈いく死なは難なすやあり然れども刀もく晴がるく物えう彼姫
人の短刀を借りもりく身を殺さば便是姫うに撃れ新しかんなてを
罪を贖べれ嗚呼あらかりと遠しく守護刀を取ってく舊の処に坐を占て
諸肩袒ぬく技放つ刀の光に且見姫は身禁めと立あがる足を離つ縛の麻
織の索ちあくば断も絶ぬと胸に留りく齧居に撲地と伏
程に藁二郎は勝に短刀の鞘推立く左の腹に拭くあっしくおえ
かくせまくと意中に工夫の眼を閉く霊時念仏六字の名号又短刀取りて
単衣の袖に巻箸く餘刀尖五六寸夏の寒北豊城の霜乎氷乎明晃々
る刃の光り今に眼を射られ膚撓くも悲しく惆悵る志を勧して
力と究めく両目を開る目識は左の脇腹へ刀尖貫樂と突立れば滅と潰る
鮮血と共に霎時も堪ず苦と叫びく仰反倒れく苦む隨に旁側に臥る

桜枝が腹を足もて磴と衝くに桜枝は一声呻き怒地に倒れ頭を擡身を起しもあらぬいかと驚く声は藁二郎は羞うるに苦痛を忍び左手つ兒立膝折回して起直る半身既に血に塗れて瘡口より頭れ出る大腸小腸膝を掩ひて松に垂る秋蔦若に掛り海藻に似たり含む刃は放さじとも尚刺立てる仇なるも深疾なれば息つ兒も絶えて桜枝はうもうもく潸然と合涙で立つ近つ兒意浅き藁二郎とのおどすや栗を拾ひ歎を勸め姫と人の勸を増すに又つもあるに奮里の丈夫の弟は自殺せしは忠義はいと貞や缺う女子なりとも恥を知る志ぞ空しくば義理ゆえ易き道あるいでう後れ行んやとその身を責る必死の勢ひ藁二郎が側に措る行方を撥取る晃りと技く吭を刺貫んと一くり乳の上四五寸ばかり刺さんと辟く鞆を握く俯うるに引ひかれて又さるに桜枝が自殺の形勢に且見姫は立つ居つ絆に狂ふ意馬心猿走るんとはすれど身の隨ならぬ喚び被んとすれども声出で悲歎徒に魂疲れる。伏沈まで位より外に亦是ぞ

後輯第四十八

今果の名對面
新鬼の新尼送

當下藁二郎は桜枝を倍と云えども婦人の傷害某がこの自殺の趣旨は爰賀殿なれば彼疑ひを解きんに日ろ怜悧なれば似ず便りを発姫と人は仕まんとは思ひ求めくその死を急ぎ婦女子は相応の名聞を怒りは憂ひ丈夫の弟といいれば狭所以をあるべき。

と問へば僅に頷く今は何とう慧ぎ兒つ人を交ぜの舎兄穂之助の妻なれと名告るまいく驚く。原来兒身は嫂なり狭ひ兒なれば心いく思ひ問ま。

もうもうぶ又何ぞの故ぞ。兄とは一処に住まこの荘院に住る又始より某を良人の

弟と知る歟と詠り問ばれたるを恥て答へず。本来告んと欲するこゝ八が父八鎌倉なる小壺の濱の漁夫字を浦平と唱れしあり世を遁れて家を只親一人。竟一人のまゝ[illegible]憂し。況親類なれば父八只管[illegible]が為に招婿をなすこゝいとがゝく是彼と求る程なれ身ゞ舎兄穂之助ぬしとが浦里を流浪て魚屋の小廚ありあひ也父八[illegible]所やありん主人なるこゝ迎て浦太郎と更名つけ婚姻を整られ八五年前の春なりしその歓び八良きとこゝも変る[illegible]辛の八月十六日の夕なりし親浦平八小壺の漁夫鰐よ隻足蛭断れて果敢なく命を隕しとう。是より海の幸なくて浦人[illegible]く生活の便著を喪ふこゝ中ふこゝ家[illegible]く借財の債八素より多なれども良人八いとゞ鰐を殺しく婦翁の怒を積んとて[illegible]ある鈎を求め又種々なる網を造りく[illegible]れども竟よ獲ぬ[illegible]ども沒收多くて煙八細々なり和田の御館よ給事なる叔母よ聊資[illegible]く両年ばかり暮し